

令和2年度

【優秀作品集】

「大切な命を守る」  
全国中学・高校生作文コンクール

警察庁 犯罪被害者支援室

## 発刊にあたって

犯罪被害者やその家族・遺族（犯罪被害者等）は、犯罪等によってその生命、身体、財産、権利・自由を侵害されるなどの直接的な被害を受けるだけでなく、周囲の人々からの心ない言動による二次的被害、職を離れざるを得なくなることによる経済的困難など、多様かつ長期間にわたる被害に苦しんでおられます。こうした方々が再び平穏な生活を取り戻すことができるようにするためには、犯罪被害者等が抱える困難や思いについて理解を深め、社会全体で犯罪被害者等を思いやり、犯罪被害者等を支える気運を醸成していくことが極めて重要です。

このような観点から、全国警察では、教育委員会や民間被害者支援団体等と連携して、これからの社会を担う中学生・高校生を対象とした犯罪被害者等による講演会である「命の大切さを学ぶ教室」の開催に積極的に取り組んでおり、受講した中学・高校生が命の大切さを学び、犯罪被害者等の心情や置かれている状況を正しく理解することで、犯罪被害者等への配慮や協力への意識の醸成に努めています。

警察庁では、この「命の大切さを学ぶ教室」の効果を一層向上させるとともに、教室の受講者だけに限らず、多くの中学・高校生が犯罪被害者等への理解を更に深め共感を生む効果を期待する施策として「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクールを開催しており、今回で十回目となります。

本コンクールの応募作品については、学ぶ教室を受講し、又は報道等により知り得たことなどを踏まえ、大切な命を守り、被害者を生ませず誰もが安全で安心して暮らせる社会を実現することに関して、自分の考えや意見等を表現した作品となっています。

本年度は、全国から一万五百五十三点もの作品の応募をいただき、その中から優秀作品を選考することができました。本冊子は、選考された作品のうち、

- ・ 国務大臣・国家公安委員会委員長賞……………二点
- ・ 文部科学大臣賞……………二点
- ・ 警察庁長官賞……………六點

を受賞した作品を取りまとめたものです。

本冊子が、犯罪被害者等が長期にわたり直面する心身の苦痛やその置かれた厳しい状況等のもとより、被害者支援の重要性等について、広く国民の皆様方に御理解いただく一助となりますことを心より願っております。

令和二年十一月

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当）堀 誠司

## 審査委員講評

令和二年度「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクールの優秀作品として、国家公安委員会委員長賞・文部科学大臣賞・警察庁長官賞・審査委員奨励賞等の各賞を受賞された皆さん、ご受賞誠にありがとうございます。心からお祝い申し上げます。このコンクールは、警察庁により平成二十三年度から始められ、今回で十回目となります。本年は、新型コロナウイルス感染症の影響によりコンクールの開催が心配されましたが、予想を大きく上回り、全国から一万点を超える優れた作品が寄せられました。作文に取り組まれた皆さんのご努力に対しまして、改めて敬意を表しますと共に感謝を申し上げます。私は初回からこの作文コンクールの審査委員を務めさせていただいていますが、毎回力作ぞろいの皆さんの作品に順位を付け、各賞を選定することは大変難しく、審査委員同士でも評価が分かれることもしばしばあります。それでは、審査委員会のメンバーの一人として、この場をお借りして講評を述べさせていただきます。

皆さんの作文を読ませていただいていることは、多くの方が、「命の大切さを学ぶ教室」を受講され、講師を務める被害者や遺族の体験談を直接聴くことにより、被害者や遺族の心情や苦悩の数々、置かれている厳しい現状、二次的被害の実情等を知って命の大切さや何気ない日常生活の幸せを痛感されているということです。また、知り得た命の大切さへの思いを自分の心の中だけに留めず、友人と話し合ったり、家族と共有するなどしながら考え方を広め、深めている方、更には、一歩前に踏み出し、命を大切にすることを決意を胸に、それを実現するために実際の行動へと移されている方もいます。このように、皆さんが感じ取られた他者への優しさ、思いやり、そして、自ら考える力、行動する力は、必ずや皆さんの今後の生き方への大きな糧となり、充実した人生への一助になるはずです。

作文コンクールの出発点は、警察庁が始めた「命の大切さを学ぶ教室」であり、この教室は犯罪の被害者や遺族等が講師となつて中学生や高校生に自らの被害体験を語り、命の大切さを深く考えてもらうものです。講師を務める被害者の体験談は聴く人の心に沁みわたり、安全で安心して暮らせる社会の構築に大いに役立つと考えます。さらに講師となる被害者の方たちにとつても精神的な回復の過程においてとても重要な役割を果たしています。

私も犯罪被害者遺族です。これからも、この教室やコンクールを通じて、一人でも多くの皆さんが、被害者の現状や被害者への適切な対応と支援の必要性等について学び、被害者を出さないために、自分にできることを考え日々を過ごしてくださることを願っています。

被害者支援先進国の欧米では「犯罪被害者への支援の充実度は、その国の文化と社会の成熟度を示す」と言われているそうです。人と人の繋がりが希薄となつている今、犯罪被害者支援は人間愛の一つの理念として、後世に伝え続けていくことが重要だと感じています。これからもこの作文コンクールにおいて皆さんのような力強く、心に響く作品に出会えることを楽しみにしています。

令和二年十一月

公益社団法人全国被害者支援ネットワーク顧問

公益社団法人被害者支援都民センター理事

大久保 恵美子

# 目次

## ☆中学生の部

### 【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・ 犯罪被害者、家族の講話を聞いて学んだこと 国富町立八代中学校 二年 山岡 佳弘 …………… 2

### 【文部科学大臣賞】

・ 「交通犯罪」について考えてみて 杉並区立泉南中学校 二年 堀井 優花 …………… 4

### 【警察庁長官賞】

・ 「命の大切さを学ぶ教室」講演を聞いて 足立区立伊興中学校 三年 カノネロ ミユキ …… 6

・ 大切な命を守るために 下野市立南河内第二中学校 三年 荻原 駈 …………… 8

・ 命のぬくもり 笠岡市・矢掛町中学校組合立小北中学校 二年 金光 咲嬉 …………… 10

☆高校生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

- ・事件の報道から考えたこと

広島県立安古市高等学校

一年

伊藤

功士郎

……

14

【文部科学大臣賞】

- ・犯罪のない未来へ

高知県立嶺北高等学校

三年

朝倉

芙架

……

16

【警察庁長官賞】

- ・思いやりで救われる命

岩手県立千厩高等学校

三年

小野寺

優唯

……

18

- ・儂い命を守るために

栄光学園高等学校

二年

水口

成寛

……

20

- ・「社会全体で命を守る」

香川県立石田高等学校

二年

國元

美佑

……

22

# 【中学生の部】

## 犯罪被害者、家族の講話を

### 聞いて学んだこと

(宮崎県)

国富町立八代中学校 二年

山岡 やまおか

佳弘 よしひろ

昨年「命の大切さを学ぶ教室」で、犯罪被害者家族の話の聞きました。ある日突然、大切な家族が犯罪に巻き込まれ、尊い命を奪われ、十七年経った今でもはつきりと覚えていて、辛く苦しい日々を送られていることを知りました。

犯罪被害について、「自分には関係ない。」「自分は大丈夫、起こることはない。」と話を聞くまでは私自身もそう思っていました。でも、負傷したり、命を奪われたりすることは誰にでも起こりうる事なんだと考えていなければいけないと、話を聞いて

思うようになりました。

その晩、一緒に講話に参加していた母と共に、被害者家族の方の話を聞いたことについて私の家族全員で話し合いました。

携帯電話やパソコンによるインターネットは、私達の生活を豊かで便利にしてくれる道具ですが、この便利さの陰で人が加害者になったり、被害者になったりする問題が起こることを知っておかなければいけないことも話し合いました。

当時の様子を涙ながらに話される被害者家族の方は、十七年経った今でも鮮明に覚えていて、その苦悩は計り知れませんでした。

周囲の人達からの中傷、事実でもない報道によって、興味本位に質問をされました。犯罪被害にあつたと、被害にあつた本人だけではなく残された家族もまた、被害にあつたことよって様々な問題が起りました。精神的な苦痛や体の不調、また、心ないうわさなどによつて傷つけられました。家族同士もショックを受け自分自身をせめてしまい、お互いを

支え合う気持ちも失ってしまいました。

被害者家族の方は、傷つき辛くても私達に命の尊さを伝え、自分達のような被害者家族がこれ以上でないようにと願いながら講話をされました。その思いを私達はしっかりと受け止めなければいけないと思います。

悲しみにたえ精一杯頑張っておられる被害者家族の人権を守るためにはどうしたらよいのか考えました。

被害者家族の方の置かれている状況は、一人一人違うので気持ちを理解しようとするのが大切だと考えます。無責任なうわさ話をしないようにしなければいけないと思います。また、自分自身に置き換えて考えてみるのが大切だと思います。そして、何かしてあげたいと思ったとき自分の気持ちと相手が見ているのは違うかもしれないので、相手の気持ちが尊重したいと思います。被害者、家族は傷ついているから立場を思いやりそばに寄りそいたいと思います。

命の大切さを学ぶ教室で被害者家族の話聞き、被害者、家族の人権問題の難しさを学び考えさせられました。

誰もが皆、平等で、人間らしく幸せに暮らす権利、「人権」はお互いに相手の立場を認め合い、権利や自由を尊重し合うことだと思います。相手の気持ちを尊重し思いやることは、全ての人達に通じることだと思います。相手の立場になって考える、言葉が見つからないときはだまって側に寄りそってあげたいと思いました。

私が学んだことは以上です。これからの私達にとっても大切なことは、正しい情報を見極める力であり、間違っていることに気付いたら勇気を持って相手に伝える力だと思います。実践できるよう努力していきたいです。

## 「交通犯罪」について考えてみて

(東京都)

杉並区立泉南中学校 二年 堀井 優花

私は今回佐藤さんの話を聞いて、とても感動しましたし、それと同時に色々なことについて考えさせられました。

一つ目に驚いた事は、日本の交通犯罪への刑の軽さについてです。交通犯罪の全ては「過失」として扱われている。つまり「殺そうとして起こした」のではない。私はこのことについて特に驚きました。「過失」だから刑は最高でも五年くらいになります。しかし「過失」だとしても人の命を奪ったことに変わりはないはず。だからこの事件の加害者の場合、刑は禁錮二年六か月というのはあまりに期間が

短すぎると思いました。

二つ目は青信号を渡っていて事件に遭うということ。もともと信号とは車と人が事故にあわないように作られたもので青のときは「今、安全に渡ることが出来ますよ。」ということを示しているはず。しかし菜緒ちゃんも青信号で渡っていたにもかかわらず、ひかれてしまいました。私はこれ聞き、現在の交差点の交通システムには事故になる危険性があることを知りました。そして歩車分離信号は人々の安全を守るために、とても重要なもので、数多くの場所に設置する必要があると思いました。また、車を運転する大人も、もっと注意をしてハンドルを操作する必要があると思いました。

三つ目は言葉による二次被害についてです。何か悲しい事があった時にかげられる「励ましの言葉」。励ましているつもりでもその言葉一つ一つが相手の心を傷つけていることがあります。私は今回の例を聞いて、何かを言うときは相手の気持ちになって考えてから言葉を発することが大切だと思いました。

次に、感動した話についてです。私が感動したのは9・11アメリカ同時多発テロ式典で読まれた詩「最後だとわかつていたなら」です。私はこの詩を聞いて、今、私たちが生きている「奇跡」についてや、「今日」という日の大切さについて気付かせられました。「明日は誰にも約束されていないのだということ。」私はこの言葉が強く印象に残っています。「明日」というのは未来であり、未来を知っている人なんて誰もいません。もしかしたら明日、大切な何か失われているかもしれません。または自分にとって明日は無いかもしれません。だから、これからはもっと「今日」という日を、仲間という人を大切にしたいと思います。

このように、私は今回佐藤さんの話を聞き、色々なことを感じ、学びました。これからも交通犯罪が0になることはないと思います。しかし、今回、泉南中の生徒がこの話を聞いたことにより、少しでも未来の交通犯罪が減っていくと思いますし、この話が日本のおおくの人々に広がっていくことを私は願います。

## 「命の大切さを学ぶ教室」

### 講演を聞いて

(東京都)

足立区立伊興中学校 三年 カノネロ ミユキ

佐藤咲子さんの講演を聞く前の私は、配布されたプリントを読み、「どうでもいい。どうせ悲劇のドラマでよく見るようなやつでしょ。そういうの聞き飽きたし、そんな暇あるなら試験勉強させてよ。」と、まったく興味も持たず、聞く気もありませんでした。実際、自分の大切な人を亡くしたことが無く、身内の葬式があってもまったく知らない人だったり「大切な命が消える」ということの重みがどれほどつらいのが、まったく分かりませんでした。また家族、友達が亡くなるようなエピソードの

ドラマを観ても、「ああ、かわいそうに」とだけ思い、自分と重ねて考えたこともありませんでした。むしろ観すぎて、本当の話を聞いても「聞き飽きたよ」と深く聞くことすらありませんでした。

そんな死についてまったく考えたことの無い私  
が、咲子さんの講演を聞いた後感じたのは、何とも  
言えない暗く重い感情と衝撃でした。また「そんな  
訳ない」と信じていない自分もいました。しかしど  
んなに嘘だと疑っても咲子さんが遭ってしまった事  
件は事実。改めてそう確信したとき、衝撃の次に  
「恐怖」という感情が迫ってきました。涙を流しな  
がら話す咲子さんの姿は生々しく、「もし咲子さん  
が私だったら…」と考えるとぞっとしました。聞く  
前の自分とは大違いです。

咲子さんが話してくれた講演は、死について触  
れ、命を大切にすることの重要さを深く考える機会  
を与えてくれました。命を粗末にするという行為が  
どれほど恐ろしいものなのか。講演後に感じた感情  
のおかげで、絶対に命を粗末にせず、大切にしてい

こうと決心しました。それだけでなく、今私がかこで文字を書けているのは、私達を守ってくれた大人や周りの人々のおかげです。だからこそ、日々家族や大人達に感謝しようと思いました。

しかし、このように命を大切にしようと思える機会があっても、これに巡り会えずに、「自殺」という自ら命を絶ってしまう人達がいまいます。そこで私は、咲子さんの話とそれを聞いて感じたこと、また命がどれだけ大切なのかを広めていこうと思います。今の時代はツイッターやインスタグラムなど手軽に何かを広められる手段が多くあります。それを活用し、命の大切さを広めていきます。

ここまで私は、この感想文を書きながら今までの自分の人生を振り返ってみると、「死んでしまいたい」と考え続けている時期と、「生きていて良かった」と幸せに感じている時期もありました。改めて人生というものは何があるか分かりません。ある日突然大切な人が死んでしまう、ということが起きてもおかしくありません。そういうときに悲しみやつ

らさに打ちのめされそうになっても抵抗するべきです。そのために普段人を想いやる気持ちが、重要になってくると私は考えます。

## 大切な命を守るために

(栃木県)

下野市立南河内第二中学校 三年

荻原 おぎわら

駈 かけろ

僕が、ある日いつものようにニュースを見ていたら、交通事故で家族を失った人が事故をなくすために訴えているニュースが流れていた。事故当時、多くのニュース番組で報道された事故だったが、あれからどのくらいの日が経ったのだろうかと思つた。

人の死にふれるのはとてもつらい。死は尊い。亡くなった人のことにふれるのは亡くなった現実を突きつけられるようで、とても辛く、苦しい。それでも忘れることはできないし、忘れたくもないし、みんなに忘れてほしくない。

僕にも忘れられない亡くなった大切な人がいる。それはあまりにも突然の出来事で僕は何も考えることができなかった。亡くなった人の家に行くと、その人の先生が肩をつかみ、泣きながら、叫んでいた。僕はその光景を見て「本当にいなくなっちゃったんだ。」と思ひ涙が止まらなかつた。いつも当たり前のようにいた人が亡くなってしまい、「当たり前」の大切さを知つた。ニュースを見たときなぜかそのことを思い出した。きっとこの人も辛いだろう。しかし、辛くても苦しくても、テレビに出て訴えているこの人を動かしているものは何なのだろう。事件や事故は毎日のように発生し、ニュース番組などで報道されている。それでもいつしか僕たちは忘れてしまう。身近なようで身近ではないからだ。でも、身近で事件や事故がおきて巻き込まれたり、自分や大切な人が命を失つてからでは、被害にあわないようにうにああすればよかつた、事故にあわないように気をつければよかつたと考えても遅い。だから、交通事故にあつてしまった人の遺族は辛く、悲しい思い

を抱え、時に傷つきながらも、同じような思いをする人を減らすために訴えているのだと思つた。

僕に何ができるのか。大切な人を亡くした人や被害にあった人の声に耳を傾け、自分や大切な人が被害にあわないためにどうしたらよいか考えて行動することではないのだろうか。そして、小さなことかもしれないけれど、みんなが誰かの心や身体を傷つけないように思いやりをもって生活することだと思ふ。みんながそうやって生きていけば、きっと事件や事故、いじめなども減っていくのではないのだろうか。

大切な人を亡くした人や、被害にあった人の声が法律をつくり、みんなの意識を変えることもあるという。声をあげている人たちの辛い思いや、苦しい思いを僕たちは理解しなければならぬ。そして、彼らの声に真剣に耳を傾け、考えなければならぬ。そして、事件や事故のニュースの裏には、声を出すこともできないくらい傷つき、苦しんでいる人が存在することも忘れてはならないと思ふ。

僕たち一人ひとりの行動や考えが国を動かすことは難しいかもしれない。でも、一人ひとりの思いが、みんなの意識を変えていき、その思いが事件や事故を減らし、傷つく人を一人でも減らすことにつながっていくのではないだろうか。

誰かを傷ついたり、誰かの命を奪つてはいけないということは当たり前のことだ。でも、その当たり前が、それぞれの毎日を生み出しているのだと思ふ。だから、僕は毎日を大切に過ごし、思いやりをもつていきたいと思ふ。

## 命のぬくもり

(岡山県)

笠岡市・矢掛町中学校組合立小北中学校 二年

金光<sup>かなみつ</sup>

咲嬉<sup>さきき</sup>

この世の中には、いじめによって亡くなってしま  
う人、いじめや暴力を受け、「死にたい」と思う人  
がたくさんいます。テレビでも、いじめや暴力など  
を受けて、自ら命を絶ってしまうという悲しい  
ニュースを見かけます。これから書くことは、いじ  
めによって我が子を失った方のお話で、私の人生を  
変えてくれたお話です。

私は、中学校入学当初、新しい環境に慣れないせ  
いか、「つらいなあ」と思うことが多々ありました。  
その方のお話を聞いているとき、私は最初、「しん  
どいなあ」と思っていました。しかし、話を聞いて

いくうちに、私の中の何かが変わっていくような気  
がしてきました。いじめによって市原さんは、我が  
子を失ってしまいました。それまでは、私たちと同  
じような普通の日々を過ごしていました。しかし、  
高校一年生の頃から、息子の圭司さんは、殴る、蹴  
るの暴行を受けるようになってしまったのです。時  
とともに、その暴力もエスカレートしていき、圭司  
さんはその暴力によって命を奪われました。十八歳  
の若さでした。市原さんには娘さんもいました。と  
ても苦しい思いをしたと思います。私は、あとに残  
された人たちも、とても悲しく、苦しい思いをして  
いると思います。圭司さんが亡くなったとき、家族  
や仲の良かった友達は、どう思ったでしょう。きっ  
と、「もつと早く気付いて助けてあげればよかつ  
た。」と、深く後悔していることでしょう。私は、  
市原さんたちの深い悲しみは十分には分かりませ  
んが、想像することはできます。私は、自分の家族が  
いなくなってしまうということを考えるだけで、心  
が張り裂けそうです。それでも、いじめや暴力で大

切な人を奪われてしまった人たちに、私は「自分を責めないで」ということを伝えたいです。圭司さんのように、無念の思いを残して亡くなった方々も、生きているときには、楽しい思い出もあつたはずで  
す。そういうとき、家族や友達が唯一の支えになつていたと思うのです。

圭司さんのように、生きたくても生きられなかつた人が、この世界にはたくさんいます。市原さんのように、大切な人を奪われてしまった人もいます。

市原さんは、お話の途中、私たちに「手をにぎってください。」と言われました。そこで実際に自分の手をにぎってみると、とても温かかったのです。たつたそれだけのことで、「生きている」ということ、自分の命のぬくもりを実感できました。私は、いじめや暴力によって失われる命がこれ以上増えないよう、今生きている私の手を、いじめをする手、暴力を振るう手には決してしません。この世界には、生きてはいけな  
い人なんて、一人もいないはずですから、その命を大切にして生きていきたいです。

# 【高校生の部】

## 事件の報道から考えたこと

(広島県)

広島県立安古市高等学校 一年 伊藤 功士郎

新型コロナウイルスのニュースが世界を揺るがしていた令和二年三月上旬、広島では、ある殺人事件の裁判にも注目が集まっていた。

その事件は平成十六年十月に県内で発生し、長らく未解決だったが、十三年半経って犯人が捕まった。そして、今年三月、広島地裁で裁判が開かれた。

私が生まれた年に起きた事件なので、その当時のことは知らないが、高校二年生だった北口聡美さんが学校から帰宅して間もなく、侵入してきた見知らぬ男に殺害され、居合わせた祖母も重傷を負わされた衝撃的な事件だったので、連日大きく報道されたらしい。

事件の風化を防ぐため、聡美さんの父、北口忠さん

は、講演やチラシ配布などで情報提供を呼びかけていた。私はニュースで北口さんの活動を何度か見かけていたが、聡美さんが被害にあった年齢に近づくにつれ、大切な命が突然奪われる事の重大性がわかってきた。しかし、殺人事件で家族を亡くす悲しみは、想像すら難しい。

裁判では、聡美さんの両親や祖母のほかに、当時小学生だった妹さんも証言していた。幸せな家庭が事件で一変し、犯人の報復を恐れ続け、事件を忘れないのに目撃者として忘れてはいけない重圧で押しつぶされそうだったと語っていた。妹さんは、幼いときから大変な重荷を背負って生きてきたのだ。私 が平穩に過ごしていた間、犯人の身勝手な行動のせいで北口さん家族はつらく悲しい日々を強いられた。同じ十五年半だが、その差を考えるとやり切れない。裁判の報道を追ううちに関心が高まり、私は北口さんの講演録なども読んだ。犯人が聡美さんの命を奪ったのに、娘を守れなかったと自分を責めていて、読みながら胸が痛んだ。

北口さんの講演で最も私の印象に残ったのは、報道や見ず知らずの人の言動に傷つけられたというこ

とだ。「恨みによる犯行か」と報道されたため聡美さんが恨みを買うような人だったと受け止められ、北口という名字を聞いた人に事件の関係者かと尋ねられ、電車の中で「家で殺されるくらいだから、どんなワルの女の子や」と話すのが耳に入ったという体験が語られていた。このような憶測が転じて、被害者に非があったという誤解が広まるのだろう。私が被害者になっても、同じ目にあうかもしれない。風評被害が、被害者やその家族をひどく傷つけることを知った。

しかし、北口さんはそのような状況の中でも、泣く暇があったら犯人を追いつめてやるとの思いで活動を続けたそうだ。事件の情報提供を呼び掛けるだけでなく、命を守るため防犯に努めるよう説き、凶悪事件の時効廃止を求める活動にも参加し、平成二十二年の法改正に繋げた。北口さんの活動のおかげで、防犯意識が高まり、時効で悲しむ被害者が減って良かったと思う。だが一方で、一番つらい立場にある人が動かなければ、防犯や法改正が成し遂げられない社会ではないかとも感じた。

裁判で、犯人は無期懲役となった。死刑を望んでいた北口さんは、聡美さんに「負けたよ」と報告し、

その日のブログには、これからは聡美さんの名誉を回復するために活動すると書いていた。事件は犯人が起こしたことだが、裁判後の北口さんに残された課題は、報道や人々の心無い言動から生じたものだということが、私の心に重くのしかかった。

大切な命が奪われる事件が無くなるのが一番だが、すぐには無くならない。被害者が報道や人々の言動で傷つけられることのない社会になるべきだが、インターネット上の誹謗中傷への対策が検討され始めたばかりの現状では、まだ時間を要するだろう。

そこで、私にできることから始めたい。まずは家族や友人に防犯の大切さを伝え、身近な人の命を守りたい。そして、被害者について憶測で語らないようにするなど、日々の言動で知らぬうちに傷つけることのないようにしたい。もし万が一、身近な人が被害にあってしまつたら、しっかりと話を聴き、泣きたいときに泣けるよう手助けしたい。

被害者に配慮し支えることが当たり前前の社会になれば、被害者を生み出す犯罪を無くす大きな力になるだろう。

## 犯罪のない未来へ

(高知県)

高知県立嶺北高等学校 三年

朝倉 あさくら

芙架 ふうか

現在、日本でも多くの被害者遺族の方々が辛い過去を抱えながら生活を送っている。

私の学校では、年に一回人権講演会が開かれており、今回の演題は「命の大切さを学ぶ」だった。講師として高松由美子さんが来てくださった。平成九年高松さんは当時十五歳だった息子さんを集団暴行により失った。私自身、被害者遺族の話を聞くのは初めてだったため、ほとんど何の知識もない状態で講演に参加した。

講演の中では、息子さんがどのようにして命を奪われたのか、加害者について、遺族の思いなど、経

験した多くを話してくださいました。息子さんが受けた暴行の内容は耳を塞ぎたくなるほどのひどいものだった。しかし、こんなにもひどいことをした加害者達は、現在、被害者遺族と同じ地域で生活し、なかには家庭を築いている人もいるのだ。自分の息子の未来は奪われたのに、加害者は幸せに生き、偶然会うかもしれない所で生活をしている。こんなにも辛いことがあるだろうか。もしも私が当事者だったなら絶対に耐えられないと思った。だが、高松さんは講演のなかでこのようなことをおっしゃっていた。「確かに犯人たちのことはとても許せない。けれども、今の自分が息子のためにできることは伝えること。多くの人に伝えることでこの事件を忘れられないように、知ってもらうために、また殺害した犯人にも忘れさせないようにするために、この活動を行っている。そして、一番の願いはこれ以上同じ思い、体験をする人を増やさないようにすること。」私は、この話を聞いたときとても胸が締め付けられ、この人権問題を他人事としてでなく自分事とし

て、しっかりと考えなくてはいけないと強く思った。だからこそ、私は講演の後、被害者遺族について調べてみた。すると、遺族は事件そのものによる直接的な被害だけでなく、その後も捜査や裁判の段階での精神的・時間的な負担、過剰な取材や報道などの被害後に生じる様々な問題（二次被害）にも苦しめられているということが分かった。遺族は心に一生消えることのない傷をおったまま生きていかなくはならないということも分かった。また、ある日突然自分の大切な人の命が奪われ、あたりまえだった日常も一瞬にしてなくなってしまうということも知った。講演の中でも高松さんが、「普通の生活を送れることが一番の幸せ。」だと言っていた。自分たちにとってのあたりまえは全くあたりまえではなくて、とても素敵でかへがえないものなのだと改めて感じた瞬間だった。

みると全国には犯罪被害者ホットラインやNPO法人などが存在することが分かった。私の地元高知にもこうち被害者支援センターがあり、電話や面談での相談を受けるなどの活動を行っている。高校生である自分は経験も年齢もまだ不足している。そのような今の私にできることは、今回の講演を忘れないこと、多くの人に伝えること、また身近な人が悪口を言っていたり、いじめているのを見たらやめるように声を掛ける、困っている人がいたら話を聞くなどの小さなことだと思う。一人でも多くの人がこの小さな取り組みをすることでやがて大きくなり犯罪のない社会になると考える。

誰かが加害者になったり被害者になるような社会は結局は社会のためにならない。犯罪は誰一人として幸せにしないはずだ。

私自身はもちろんのこと、すべての人が命の重みを知り、自分の命も相手の命も大切に思えることが最も重要であり、生きられていることに感謝しなくてはならないのだ。

## 思いやりで救われる命

(岩手県)

岩手県立千厩高等学校 三年 小野<sup>おの</sup>寺<sup>でら</sup> 優唯<sup>ゆい</sup>

「命は大切だ」。今まで何度も言われてきた言葉であり、聞くと当たり前のように感じる言葉である。しかし、私は、日々を過ごすなかでそのようなことを考えたり、実感したりすることはほとんどなく、漠然と「自分は何のために生きているのか」と、「生」に対してネガティブな感情を持っていた。

以前、学校で行われた講演会で、交通事故が原因で息子さんを亡くされた方のお話を聞いた。私はそれまで、身近な人を事故や事件で亡くした経験はなかったため、実際に被害を受けた方のお話を聞いて衝撃を受けた。命はほんの一瞬で奪われてしまうと

いうこと、遺族が深い心の傷を負うこと。今まであまり知らずとしていなかったことが、講師の方のリアルな言葉で伝えられ、私は当たり前前に感じていた「命の大切さ」がどれだけ重要なものであるかを改めて感じた。その一時間で、私の「生」に対する感情が変わったように思う。日々たくさんのことに悩むのも、辛い思いをするのも楽しい思いをするのも、すべて自分が生きているからできることなのだと思いますようになった。講師の方の思いを完全に理解することは難しいかもしれない。しかし、お話を聞いた私たちは、それを理解しようとする努力や、命について考えることができる。一人ひとりがいっかり考えることが思いやりにつながり、犯罪被害を減らす第一歩になると思う。

命は私たちに平等に与えられているものであり、失われていい命はない。私はそう思っている。毎日のようにニュースで命を奪う事件、事故を目にする。殺人や事故のように直接的に命を奪うものもあれば、いじめ、誹謗中傷のように精神的に追いつめら

れ最終的に自殺に至ってしまうというものもある。

近頃は以前に比べて、精神的な殺人に関するニュースを目にすることが多いように感じる。実際に年々、誹謗中傷被害の事件数は増加傾向にあるという。この原因には、SNSやスマートフォンの普及が大きく関わっていると思う。学校におけるいじめでも、実際に手を出さずにSNSで悪口を書き込んだり嫌がらせをしたりするケースが増加している。匿名で書き込めることから、いじめている側には「いじめをしている」という意識がない場合もある。どこからがいじめなのか、はっきりとした定義がないことも一因かもしれないが、「遊びのつもりだった」では許されない。等しく命を授けられた以上、人には平等に生きる権利があると思う。同じ環境に生きているのに、誰かのせいで生きづらい思いをしている人と、その生きづらさを故意的につくりあげている人がいる。私はこの状態があつてはならないと思う。芸能人がSNSでの誹謗中傷を苦に自殺した事件から、発信者情報開示請求の制度改正の

動きが出てきた。制度の見直しが進んでいるなか、私たちのSNSに対する姿勢は見直さなくて良いのか。今まで被害を受けてきた方々の思いを私たちはしっかり受け取り学んでいく必要があると思う。対面でも、SNSでも、言葉の先には人がいるということを常に心に留め、思いやりと想像力を働かせて発信や行動をする。特別なことをしなくても、その思いやりだけで救われる人は大勢いるはずだ。

命には、一人の人間だけでなく、その人に関わる人全員の人生が詰まっている。一人一人が自分の命を大切にすることで、自然と周囲の人の命も大切だと考えられるようになるだろう。それが、最終的に犯罪被害を減らすことにつながると思う。家族や友人など、大事な人を守るためにも、私は自分の命を大切にし、思いやりを持って生きていこうと思う。

## 夢い命を守るために

(神奈川県)

栄光学園高等学校 二年

水口 みずぐち

成寛 なゆた

「できるなら私が代わってあげたかった。」去年、泥酔したドライバーによる交通事故で息子を亡くした母親の講演会に僕が参加した時、母親が涙を呑んで発した一言だ。大切な唯一の息子を一瞬のうちに奪われてしまった彼女の悲痛な言葉は、一言一言が僕の心に深く突き刺さった。書類上においての事件が終わったとしても、残された被害者家族が心に負った傷は一生消えることはない。失ってしまった命はもう取り返せない。頭では分かっていたけど、その日、僕は命の儚さというものを心の底から実感したような気がした。

また同時に、そもそもどうして命が大切なのか、という事を考えるようになった。そして僕は一つの答えを見つけた。それは、命が簡単に奪われうるものだから。まるで手の平で掬った水の如く、気付いたらスウッと流れ落ちてしまう。だから僕たちは日々他人を思いやり、気遣い、命を大切にして生きようとしている。

でも現実はどうだろう。毎年想像をはるかに超える件数の交通事故で理不尽に奪われてゆく命。世の中はこうした「予期せぬ突然の死」で溢れている。命が簡単に奪われてしまうという現状は何一つ変わっていないのだ。そして交通事故で大切な命が突然奪われてしまう事は、被害者の家族や知人を悲しみの底に突き落とすだけでなく、加害者も悔悟の念に苛まれ、その家族も周りから理不尽な社会的制裁を受けて苦しむ。

交通事故は誰も幸せにしない。誰もが苦しむ。だから絶対に起こってはならないと思う。交通事故をゼロにするなんて不可能だという人もいるだろう。

だが、たとえどんなにそれが難しいとしても僕たち一人一人が努力をしなければこの社会から交通事故で悲しむ人を減らせない、身近の大切な人を失ってしまうかもしれない。

では、一体僕たちはどうすれば良いのだろうか。それは、僕たち一人一人の日々の心掛け、そして命の大切さの理解以外にないと僕は思っている。いくら僕が一人で声をあげても現実とは変わらない。僕たち全員が日頃からより一層の交通安全を心掛け、時には互いを見守り、支え合う。今この社会でどれだけ命が交通事故によって理不尽に奪われているかを知り、僕たち全員が自分にできる事を考える。理想論かもしれない、だがこういった事をしなければ今後悲しみの連鎖が止まることはないのだ。

もう一つ。誰にだって大切な人はいる。何としてでも守りたい人がいる。そしてそれは自分以外の「誰か」も同じ。だから自分の大切な人の命を守るためには、まず自分の命を自分で守る、そして「誰か」の大切な人の命も守らなければならない。みんな

ながこの「誰か」に対して思いやりを持ち互いに守り合うのならば、不幸な交通事故、更には日常に溢れている沢山の心ない事件が無くなる日がきっと来るはずだ、僕はそう思っている。

命は儂い。儂いからこそみんな互いに支え合って生きている。一人では決して生きてはいけず誰かのおかげで僕たちは生きている。このことを再度心に刻みつけようと思った。確かにいまこの瞬間、世界の何処かで命が理不尽に奪われているかもしれない。不注意な運転による交通事故で何の罪もない人達が亡くなっているかもしれない。世の中ではこうしたニュースにならない出来事が沢山起こっている。だが、見て見ぬ振りをするのはもう止めよう。「知らない」ということは「考えない」ということの理由になどならない。僕たち一人一人が真剣に「命の大切さ」について考える時、目指すべきより良い社会に一歩近付くのみだから。

## 「社会全体で命を守る」

(香川県)

香川県立石田高等学校 二年

國元 美佑

五年前の十一月のことでした。小学生だった私は、いつものように学校から帰って自宅でくつろいでいると、思いがけず父から電話がありました。

「お母さんが交通事故に遭った。」

電話口で父に言われ、突然のことに私は頭が真っ白になりました。そして、電話を切った後、涙が止まりませんでした。昨日の夜、一緒に食卓を囲んで母が作ったカレーを食べて、今朝も当たり前のよう

に「いつてきます。」

と言うと、

「いつてらっしゃい。」

と母から返事が返ってきて、私はいつも通り登校したのです。でも、そんな何気ない日常が急になくなるのではないかと思うと、私は電話口で悲しさや不安で押しつぶされるような感覚になりました。高校生になった今でも、その時の苦しさは昨日のこのように覚えています。

幸い母は、軽い怪我で済みました。しかし、あの日の経験から私は、自分が当たり前のように思っている日常生活や、自分の周りの人たちという存在を、もっと大切にしなければならぬと思うようになりました。

今回、学校で開催された「命の大切さを学ぶ教室」では、飲酒運転の怖さについて学びました。講演では、実際に経験された方しか分からない事故当時の状況や気持ちなどがひしひしと伝わってきて、聴いている私も憤りを覚えたり、悲しくなったりしました。「自分は大丈夫」、「少ししか飲んでないから、大丈夫」、そんな身勝手な気持ちで誰かの命を奪う事故を起こすことは、許されないと思いました。交

通ルールをきちんと守って生活している他人を傷つけたり、まして死なせてしまったりするという事故は、どうしてなくならないのか。一人ひとりのちよつとした甘えの気持ちだが、大きな、恐ろしい事故に繋がるのが分かりました。

飲酒運転による死亡事故の犠牲者は、講演をしてくださった山本美也子さんの息子さんでした。事故は、息子さんが友人の家へ向かっている時に起こり、一緒に居た友人も亡くなったそうです。山本さんも、息子さんの友人のご家族も、まさか自分たちの大切な子どもが交通事故に遭うなんて、そしてある日突然、もう一生会えなくなるなんて思ってもいなかったはずです。遺されたご家族の気持ちを考えると、講演を聴いていた私も胸が締め付けられるようでした。そして、私の中で今まではどこか他人事のように感じていた飲酒運転に対するイメージが、がらりと変わりました。

交通事故は、いつ、どんな形で起こるかなんて誰にも分かりません。自分が交通事故に遭うのか、そ

れとも自分の大切な人が事故に遭うのか。そして、自分のせいで誰かを死なせてしまう可能性だってあるのです。

今回の講演で私は、山本さんの

「大切な命がなくなってから変わる社会はおかしい。」という言葉が、とても心に残っています。誰かが大きな事故に遭って亡くなったから、もつと地域で交通安全運動をしようとか、飲酒運転撲滅の呼びかけをしようというのも間違っではいけません。しかし、本来は、誰かが悲惨な事故で命を落とす前に、一人ひとりが安全運転や交通ルールの遵守を心掛けたり、啓発活動を行ったりして、社会全体で命を守っていくということが大切だと思います。

現在、日本における一年間の交通事故死亡者数は、三千人を超えています。その数を少しでも減らすために、そして身近な大切な人たちを守るように、私も自分のできることを精一杯やって命を守る社会に貢献していきたいと思えます。

